

## 6. 笹川における稲作の変遷と稲作グループが地域に果たす役割

土井 冬樹

### はじめに

私の出身地である伊豆大島は火山島のため粘土が少なく、水をためることができない。そのため田圃がなく、幼い頃から稲作というものはしたことがなかった。反対に、笹川は川を挟んで、家々と田圃という風景である。調査をはじめの頃は、ただきれいな景色だというようにしか思っていなかった。

笹川の稲作について興味を持ったのは、2012年5月の中頃、「稲作グループささ郷」の田植えに参加させてもらったときだった。稲作ができなくなった人たちの代わりに田圃をやる、という話を聞いて、笹川では、いまでこそこうしたグループが必要になっているが、昔はどのような稲作が行われていたのか、そして、このグループは笹川でどのような存在となっているのかと興味が広がり、稲作のことを調べたいと思うようになった。

この報告では、まず笹川におけるかつての稲作、そして現在行われている稲作について説明する。次に笹川で稲作をしていた人、現在稲作をしている人への聞き取りから得られた語りをもとに、笹川で田圃というものがどのように捉えられているのか、そしてとりわけ「稲作グループささ郷」については、それがどのような集団で、グループメンバーや笹川という地域にどのような影響を与えているかを考察する。調査は、主に聞き取りで、2012年8月13～26日、9月20～26日に泊まりがけでおこない、その他土日や祝日などにも訪れた。稲作グループの活動については参与観察をした。

### 1. 笹川の概要

#### 1-1. 笹川の地理

笹川は周囲を山に囲まれている。そのため日照時間が短く、夏場は日中こそ暑いですが、夜中には10℃ほど気温が下がる。また山が近いこともあり、川の水が冷たい。稲は水が冷たいとおいしくなるとされ、寒暖の差があるところだと甘い米ができるともいわれる。笹川はこうした点が合致した、稲作に適した土地である。

ただ、気候的、立地的な側面を除けば、山間であるため土地が狭く、平野のように整った圃場整備をすることができない、斜面があつて畦あぜが高くなるなどのことがあつて、機械を田に入れるときは幾分か不便である。

#### 1-2. 出稼ぎの村

笹川は、大正時代の頃から出稼ぎの村であった。笹川の村人のうち、働き盛りの男性のほとんどは出稼ぎ（タビ）に出て、村から遠く離れた地で過ごした。泊町で定職に就くよ

り、土方として遠方に出稼ぎにでて働いたほうが多く稼ぐことができたという。そのため、ほとんどの田圃の仕事は、残された家族であるのが一般的だった。

当時の男性は、春、田おこしがすむと出稼ぎに行き、お盆の時期に笹川に戻った。その後、8月~~28~~<sup>27</sup>日を本祭りとする笹川の秋祭りに参加し、稲刈りの準備をすると9月の月上旬にまた出稼ぎに行く。次に帰ってくるのは年末で、年を越したあと出稼ぎに行くこともあったが、多くは笹川で冬を越した。冬の時期、笹川に残った男性たちは、町内会に一つずつある倶楽部と呼ばれる公民館のような集会所に集まって藁仕事をする。そのときに、その年一年分のわらじや、<sup>みの</sup>蓑、かごなどを作った。そして、春になるとまた田おこしをしてから村を出て行く、という生活をしてきた。

## 2. 笹川の稲作

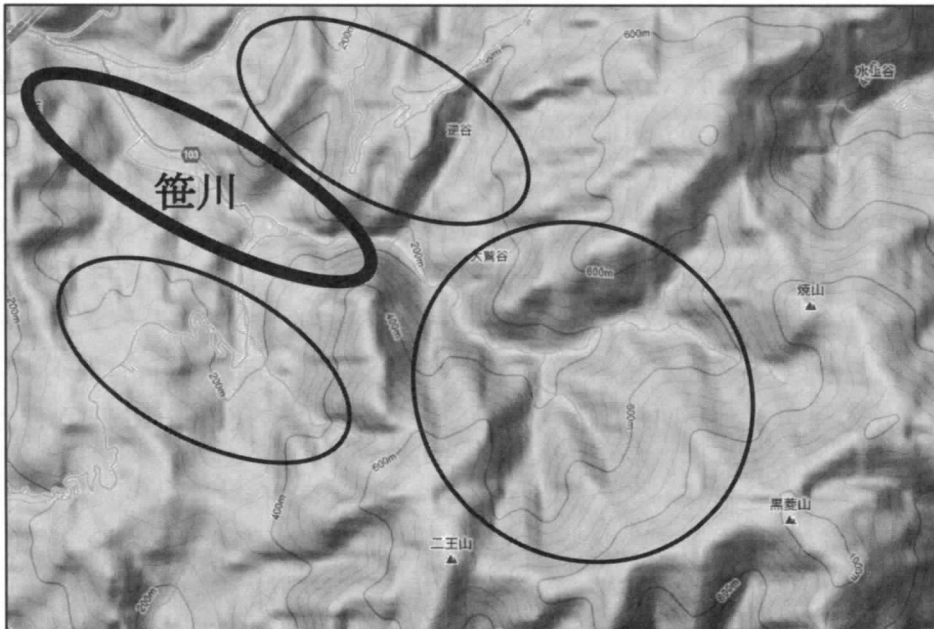


図 1. 山田の分布 (Google map)

以下、笹川の稲作について、過去から現在までの変遷を書く。なお、この章にある「山田」とは、山の中にある田圃のことで、村の田圃と対比して考えられている。村の田圃は、オヤッサンと呼ばれる一部の土地持ちのものとなっていたので、分家など多くの村人は、山に田圃を作っていた。山田は管理が大変ではあったが、畦に傾斜があるため一坪あたりの面積が大きく、また平らなところにある田圃より広いので枝豆や小豆などの作物を多く植えることができた。

山田の分布はしっかり把握できていないが、笹川を中心として、南は共有林の方まで、東は宮崎や境の方まで広がっていたという。現在ではそのほとんどが杉林となっており、「杉が見えるところは、もともと山田だった」と住民は話す。図 1 は、聞き取りからおおよその山田の分布を示したものである。集落近くにあるものもあるが、田圃に行くために

山を二つ三つ越えなくてはならないところも多く、標高にして 200 メートルから 800 メートル辺りに作られていた。

## 2-1. 戦前戦後の笹川の稲作

ここでは、笹川に住む 70~80 代の人からの聞き取りをもとに、第二次世界大戦前後から、機械化がはじまる 1960 年代初頭までの稲作について報告する。



写真 1. マンノ



写真 2. ヘランガ

### 田おこし

田おこしは春先におこなわれる。田おこしとは、前年使った田を耕し、「眠りから覚ます」ことで、主に家族でおこなっていた。

田おこしは、まずマンノという道具(写真 1)を使って、前年刈りとったあと残された稲の株を掘り起こすことから始まる。これをアラオコシという。マンノは鋤のように使うもので、これで株を掘り起こす。それが終わると、次はミツンガという道具で、マンノを使って起こしたアラ(稲株とその土のかたまり)を細かくする。これを小さくコギルという。そうしてから、そのあらくれをシロカキマンガで掻いて最後の掘り起こしを行う。シロカキマンガは、横に広いフォークのような形で、歯が 10 数本ついているものである。

裕福な家では多くの場合牛や馬を飼っており、シロカキマンガを家畜につないで起こした。数軒で共同して牛馬を飼うこともあったが、家畜を飼っていない家もあり、そうしたところは人から借りて作業をした。しかし、借りるときには相当な金額がかかったため、家畜を使わず人力で作業をすることもあった。

家畜を使う場合、鼻輪に 1.5~2 メートルほどの笹を結んで、それを引っ張って先導する者(ハナトリ)がついた。だいたいそれは女性や子どもの仕事で、後ろのシロカキマンガを土に押し込んで操作するのが男性の仕事だった。人が 3 人いると、ハナトリとシロカキマンガを操作する人、そしてその後ろでおこしたところをならす人とで一人ずつ役割分担をした。

土をならし終わると、肥料として土手の草を刈ったものを田圃に入れ、冷凍のニシンを

砕いてまいた。牛馬を飼っている家では、刈った草と牛馬の糞とを混ぜて堆肥にしてそれを肥料に使った。田おこしは、基本的にそれぞれの家族で行うが、この堆肥を運ぶのは力のいる仕事だったので、人夫を雇って村の田圃や山田に運んでもらっていた。

畦を作るのも大切な仕事だった。畦はヘランガ（写真2）で稲株をおこして重ね、それを固めて作る。またモグラが穴を掘ったり、雨などで緩んだりするため、杵で畦をうって田圃を囲う。これは、子どものうちからやるようにと親にいわれ手伝うものだった。畦ができたなら水を張って田圃の準備は完成する。畦には枝豆や小豆を植えて育てた。

### 苗代作り

田おこしが終わると、その田の隅にここと決めて苗代をつくった。去年残しておいたもみをばらばらとまいて、そのあと一足分の隙間を作り、その横にまたまく。それが生長すると、片手で握れるくらいの量でまとめていって、田植えの時に使った。

### 田植え

田植えは、ワクを使っておこなわれた。ワクとは、長さが2~3メートルの六角柱で、田に転がして等間隔の跡をつける道具である。田植えをするときにはその跡を目安に植えた。現在使われている機械と比べると苗と苗との間隔が広く、株の大きさがほぼ均一に生長する。田圃が四角形であればワクを使うことができたが、三角形などの場合ワクを使えないので、植える人の経験で田植えがされた。

田植えの時期は、現在と比べると遅く、笹川では5月末頃だった。また、この頃は、宮崎や境の方に田圃を持つことがはやっていたが、それらはドロムシの影響で6月に入ってから田植えをした。笹川ではドロムシと呼ばれているが、正式名称はイネドロオイムシといい、稲を白く腐らせる虫である。ドロムシは、6月に入ると宮崎や境の田圃に出てきた。そのため、6月の頭に箕このようなもので田の水をすくい、ドロムシを除いてから田植えをした。

田植えは、村の内外関係なく親戚を呼んだり、また近所で集まったりして手伝いあった。笹川では「イノココロ」と言われるものがあり、親戚、近所同士などで手伝ったら手伝い返す、という風習、考え方があったため、こういったやり取りはよくあったという。また、そのようにお互い助け合うことを、イイスル、イイサスとも言う。

また、大正前期やそれ以前には、広い土地を持った家は「いついつに田圃をする」というのが決まっており、手のあいている人がその日に手伝いをするると昼食と米2升がもらえた。しかし、それ以降出稼ぎがはじまり男性が村から出て行くようになって、村全体に人手が減っていくと、この風習は姿を消すようになる。

田植えをするとき、男性が笹川にいる場合は、男性が朝早くに田圃に行ってワクを回して跡をつけ、そのあと女性が田植えをした。子どもは学校から田植え休みを3日ほどもらっており、休憩のときのお茶やご飯を持ってきたり、力がついて運べるようになったら苗を天秤棒で運んだりした。

## 草取り

草取りには、まず一番取りというものがあつた。田植えから 10 日後くらいに、田圃の中に入って、苗の周りにある草を抜かずに土の中に押し込む。この頃は稲の根が張り出すくらいであるため、苗を抜いてしまわないように気をつけなくてはいけなかつた。それからまた 10 日後に二番取り、そしてさらに 10 日後に三番取りまでやつた。草取りとはいうものの、このように草を泥に押し込むだけのものだつた。三番取りの時期になると、草を押すためにかがんだとき、苗が生長して目や顔に刺さるので、防御のためにお面のようなものを被つた。

これは、2~3 人でイイサしてやることもあつたが、家族だけでやることもあつた。

## 草刈り (クロ刈り)

草取りが終わる頃、今度は土手の草刈りがはじまる。土手の草はクロと呼ばれ、クロ刈りとも言われた。クロは、牛や馬などの家畜の餌に使うほか、翌年の田の肥やしにするため田の横の土手に積み重ねてとつておいた。これをチュウという。

## 稲刈り

田植えの項で書いた、ワクを使ってする田植えでは、現在の機械での田植えと違い、株がほとんど同じ大きさに生長したため、5 株刈つて置き、もう 5 株を刈つて、それを稲架に掛けるときに開きやすくするため、「V」の字の様に重ねてからからげていた。からげるといふのは、刈つた稲を乾かすときに稲架にかけるため、写真 3 のように束ねることである。通常、水を抜いて田圃の土を乾かしてから稲刈りをしたが、山田には水が抜けず土が乾かない沼田もあり、そういった田圃ではぬかるんだままで稲刈りをした。沼田の場合、最初のうちはからげた稲束を畦に置いていくが、田の中の方に進むと、杉の葉を重ねたものや木の板などを浮かべてそこに稲束を置き、いっぱいになると畦の方に運んだ。

稲刈りは、小中学生も、「手伝わないとご飯を出さないよ」などと親から言われてやる仕事だつた。また、田植えと同じように人と集まったり、人を呼んだりしてイイサした。

刈つた稲は稲架場へ持つて行って掛ける。稲架場まで刈つた稲を運ぶのは、学校が休みであれば子どものやる仕事で、運ぶときには、5 株と 5 株でからげた稲束を 18 集めて一つに結んだ。この 18 集めたものを一束いっそくと呼ぶ。

男性は、お盆の時期に帰つてきて、笹川の一番大きな行事である秋祭りに出る。そして、笹川にいる間に、作業がしやすくなるように田から稲架場までの道刈りをした。それから、稲架には杉の木を使ったが、その稲架場の下刈りをして、写真 4 のような稲架を作つてから出稼ぎに出た。そのあと一週間ほどしたらまた出稼ぎに行った。そのため、稲刈りも一般的には女性の仕事であつた。

日中はずっと稲刈りをするため、稲架掛けは夜中、月夜の晩にやつた。稲架が 4 段より高いところになると、稲架掛けする人ははしごで上に行き、下の人に稲束投げあげてもらい、それを受け取つては掛けた。この稲束投げはヤンダスといつて、主に子どもがやる仕

事だった。学校から帰って夕飯前にやらされることもあったという。写真 5 は、はしごを使って稲架掛けをしている様子である。一番上の段の高さはだいたい 3 メートルほどになる。

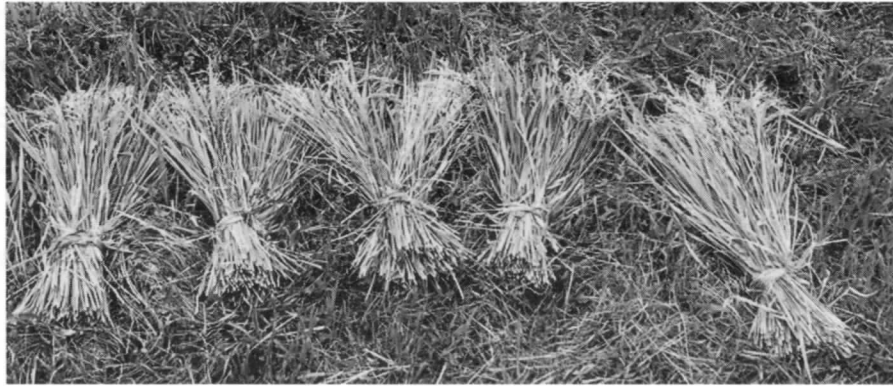


写真 3. からげた稲

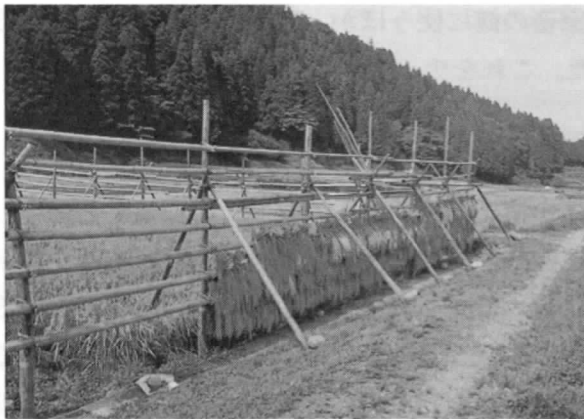


写真 4. 稲架と稲架掛けされた稲



写真 5. 稲架掛けの様子

稲架で稲が乾いてくると、脱穀をする。脱穀には、足踏みでもみをとる仕掛けが回る仕組みの脱穀機を使い、山田の場合これを稲架場の近くまで持って行った。藁の分だけでも軽くして運ぶためである。足踏みをするのもなかなか大変なため、子どもに足踏みをさせることも多かった。また、水路を持っている人は、ダイロといって、足で踏む代わりに水車を使って回す脱穀機を使った。

山田だと日が陰るのが早く、稲架掛けをしても稲がすっかり乾かないこともあった。そのときは、脱穀をしたあとに家の庭など日当りのいい場所にむしろを敷いてその上に米を広げて干した。それを 1~2 時間の間隔で、稲を混ぜて場所をかえ、乾きやすくなるようにした。これをテガヤスという。今度は日が暮れる前、稲粒が暖かいうちにカマス（かご）に戻し、家の中に入れる。こうしたことを繰り返してからからになるまで乾かした。

もみすりは、笹川にもみをする道具がなかったため、農協に頼んで持ってきてもらっていた。それを、10~15 軒くらいの人が、その日一日でできる分の米だけ持ってきてもみすりをした。それ以前は、ごまをするような方法でもみすりをしたという。

米は、自分たちで食べるものの他、年貢としてオヤッサン（土地持ち）に渡したり、農

協納めといって農協に出荷したりしていた。笹川の米はその頃からおいしいといわれていた。

## 2-2. 機械化の進展と出稼ぎの終わり

1960年代から、稲作の機械化が笹川でも起き始め、テイラーという<sup>ことうんま</sup>耕耘機や、バインダーという稲刈り機が入るようになった。バインダーは、刈りとりながら稲を束ねる機械で、そのあと簡単に稲架を使って稲を乾かせるようになった。

はじめのうちは機械が高価だったので、数軒で一台の機械を買い、その仲間内で交代で使っていた。テイラーでもバインダーでも、山田に運ぶのは大変な作業で、引く人と押す人とに分かれて皆で運んだという。

しかし、高度経済成長期で景気が良くなり余裕が出てくるようになると、自分のしたいときにできる、ということもあって個人でそれぞれ機械をかうようになっていった。こうして、多くの人手を必要とした手作業でおこなう稲作は、機械があれば家族だけでできるものとなっていき、イイスルことが次第に減っていくようになった。

また、仕事が泊の町の方でできるようになったり、それまでの土方としての経験を生かして建設業を地元で立ち上げたりして、出稼ぎに行く男性はほとんどいなくなった。そのため、以前と比べると稲作は夫婦でおこなうところが多くなっていった。そして、機械化が進み、トラクターなどが出てくるようになると、その運転はおおむね男性がするものとなった。

その後も、田植機やもみすり機、コンバインや乾燥機なども導入されるようになり、田圃の仕事は親戚、近所の協力で行うものから次第に家族化、個人化していくようになる。

## 2-3. 山田の終わり

1970年代には、上で述べたような機械化が進展していく一方、山田が終わりを迎えるようになる。

その原因の一つは減反政策である。減反政策は1970年頃から強く押し進められるようになった、米の生産調整のための国策である。米の作付け面積のうち、一部を大豆や小麦などに転作するというこの政策は、多くの人に山田をやめさせるきっかけとなった。

また、1969年と1972年にあった笹川の水害も、大きな原因の一つである。この水害で、山田自体がだめになったり、山田まで通じている道が流され田圃に行けなくなったりして、山田をやめたという人は多い。

その水害の結果、女性の農作業が減り稼ぎもなくなってしまうため、富山市大沢野から「朝日電子」の<sup>こうば</sup>工場を誘致した。もともと田圃の作業などが落ち着くと、女性も土方などの日雇いの仕事に出て行くことが多かった。そのため、村の外へ行かなくても稼ぎができる、ということで多くの人がこの工場に勤めるようになったが、仕事の忙しさなどで、水害の影響が少なく、山田を続けていた人たちも村から離れたところにある山田の管理にまで手が回らなくなった。山田は次第に放棄され、村の田圃だけが使われるようになってい

った。

この時代を境に、山田には杉の苗木が植えられ、ほとんどが杉林となった。その杉も、はじめのうちは下刈りをしたり、冬を越したら杉起こしをしたり、枝払いをしたりと管理をしていたが、木材の価格が下落して金にならなくなったため、管理されなくなっているのが現状である。

## 2-4. 現在行われている笹川の稲作

山田は、書いたとおりに放棄され終わりを迎えたが、村の田圃はその後も続いている。ここでは、現在おこなわれている笹川の稲作について紹介する。

### 2-4-1. 笹川の稲作の一般的な形態

ここで一般的とは、笹川の多くの家がこの形態をとっているということである。現在、田おこしから、田植え、稲刈り、精米まで、すべて機械が用いられている。笹川でも圃場整備が約20年前におこなわれ、機械での稲作がしやすくなっている。

田おこしはトラクターで行う。田植えは田植機でおこなうが、機械に苗を追加したり、植えきれない田の角のところを植えたりなどやることもあるため、少なくとも3人ほどの手を使う。また、手押し式の田植機しか持っていない人は、車型の機械を持っている人に代わりにしてもらうこともある。稲刈りは、全体をコンバインで刈るが、刈りきれない隅は人が刈ってコンバインの脱穀機にかける。脱穀された米は、そのまま乾燥機に運ばれ、そこで精米までおこなわれる。

また、機械の他に、畦には除草剤、田圃には防虫剤をまくようになるなど様々なところで近代化が図られ、かつてのような手間ひまがずっとかからなくなっている。

### 2-4-2. 笹川の稲作の他の形態

笹川では、現在でも稲架掛けをおこなっている家が二軒だけある。

私はそのうち一軒からしか話を聞くことができなかったが、その家では、上で紹介したものと違った稲作をしている。

田植えには、車型のものとは違い、手押しのものを使っている。そのため、車型のものよりは手がかかるし、運転をするのにも力を使う。また、稲刈りには上でも述べたバインダーという稲束をからげる機械を使い、そこでからげたものを田圃の近くに建てている稲架にかける。

このようなやり方を続けているのは、「機械を買うお金がないから」とのことだったが、こうしたやり方はとても気に入っているようで、田圃を主に管理している70代男性は「稲架に掛けると、やっぱり米を作ったなあという気になる」と語った。稲架掛けをすると、茎の栄養分が稲穂のほうに下りて、味が良くなる。稲穂は稲架で半分実る、ともいわれている。



現在田圃を見ているのは70代の夫婦だが、稲刈りのときには息子が富山市や他県からも手伝いに帰ってくる。稲架掛けをするときには、親子三代で作業をしていた。

## 2-5. 荒れ田の利用と担い手不足

笹川では使われなくなった田圃を杉林にする以外の活用がなされているところがある。一つは、減反のあった頃からはじまった活動で、みょうが組合である。笹川では水が冷たくきれいだから、ということで、長野から諏訪みょうがの種を買い、それを育てている。現在ではみょうが組合員の数も減ったが、多いときには20名ほどの組合員で、稲作をしなくなった山田などにみょうがを育てて、写真6のように加工し出荷していた。最盛期には京都など関西の方にまで笹川のみょうがは流通していたという。

二つ目に、田圃があったところに実バラを植える、という活動もここ2年の間にされている。実バラとは、バラの花ではなく、そのあとにできる実を切り花のようにして鑑賞するものである。2012年の10月には、実バラの初の収穫があり、全部で2500本ほどの実バラが東京に出荷された。

このように、使われなくなった田圃を、ただ捨てて荒れ地にするだけではなく、有効活用をしようという動きもなされている。

その一方、担い手の不足は見逃ごせない問題である。写真7は放棄され、荒れ田となった場所である。戦後、学校へ行くためや、仕事を求めて村を出て、そのまま戻ってこない人が多くいる。その結果、営農者の高齢化が進み、跡継ぎのいない田圃が増えた。



写真6. 笹川みょうが組合の漬け物



写真7. 荒れ田(左)と稲架に使われていた杉(中央)

## 2-5. 小まとめ

戦後の笹川の稲作は、出稼ぎをする男性が力の必要な作業だけをやり、その他は女性を中心として、近所や親戚とともに手作業でするものだった。それから、徐々に機械が入り始めるようになり、人の手をそれほど借りずに稲作ができるようになっていく。初期の機械は、山田に運んだり、田圃に入らなくてはならなかったりしたが、山田がほとんど使われなくなり、また機械化が進むに連れて、機械に乗って運転するだけでほとんど何でも作業ができるようになった。現在の稲作は、主に男性が、機械を使ってするものへと変化し

ている。

使われなくなった田圃は、杉林になったり有効利用されたりしてきたが、その一方 10 年ほど前には高齢化と跡継ぎ不足により、荒れ田の問題が出てきた。荒れ田は虫や草を近くの田圃に移してしまうことがあるため問題視されている。次の節では、その荒れ田の問題を解決するために結成された笹川のグループについて報告する。

### 3. 稲作グループささ郷

#### 3-1. 稲作グループささ郷の概要

稲作グループささ郷（以下「稲作グループ」）は、2003 年に作られた、笹川の稲作をするグループである。結成当時、30～40 代の人を集めたグループで、笹川に増えた荒れ田を耕すために、農協笹川支部と生産組合長からの要望で立ち上げられた。

もともとは、集落営農をしないか、という話が笹川にあったという。集落営農については後述する。しかし、その頃農業に従事していた世代が、新しい機械を買うのには金がかかりすぎるし、これから先どれくらい稲作が続けられるかもわからない、ということで断った。管理されなくなった笹川の田圃は、泊町月山の農家に使ってもらっていた。しかし、その人も農業ができなくなり、残った荒れ田が問題となったとき、一世代若い人たちに声がかかった。結果、「(稲作が) できない人の余った田圃を代わりにやる」というグループが結成された。

結成当時、耕す田圃は 5 枚で 6 反ほどであった。2012 年春には 25 枚で 2 町 5 反ほどになり、笹川の田圃の半分以上を耕していることになる。メンバーは、8 人ではじまり、現在は 9 人で活動をおこなっている。活動資金はなく、機械類はすべて持ち寄りで運営される。作った米の半数は農協におろされ、注文があるものについては笹川米として売り出す。米の売り上げは、メンバー各人の日当と機械代、また飲み会や旅行代に使われる。会社のような組織ではないので、売り上げは基本的に使い切るという形をとっている。また、このような形態は小作農のように見えるが、田圃の持ち主に年貢として、米や金を渡すことはない。

#### 3-2. 集落営農との違い

この稲作グループは集落営農という、現在国が推進している農業のやり方と似ているようにも見える。集落営農とは、集落が農地や機械を共同で利用し作業することで生産コストを減らすことができる、女性や高齢者も含めて活動することで農地の有効利用と遊休農地の解消が図れる、集落ぐるみで行う営農活動で連帯感が深まり、農村の文化の継承やコミュニティが活性化する、というメリットを掲げ推進されたもので、「集落を単位として、生産行程<sup>5</sup>の全部又は一部について共同で取り組む組織」（農林水産省）のことを指す。この

<sup>5</sup> 生産工程の間違いか。ここではホームページに記されていた通りに示す。

定義だけを見ると、笹川の稲作グループもほとんど同じように見えるが、詳細を見ると違っている。

農林水産省は、「集落を単位として」という文言に注釈をつけて、「集落営農を構成する農家の範囲が、ひとつの農業集落を基本的な単位としていること(以下略)」としているが、笹川では数名の比較的若い農家の人がグループに所属しているだけで、その他の農家はメンバーに含まれていない。

また、「生産行程の全部又は一部について共同で取り組む組織」については、「農業生産過程における一部または全部についての共同化・統一化に関する合意」の下に実施されている組織のことを指す。合意する内容とは、「(1) 集落で農業用機械を共同所有し(以下略)」や、「(3) 集落の農地全体をひとつの農場とみなし(以下略)」などの文言で記されている。しかし、稲作グループで用いる機械は、上で書いた通り持ち寄りのものである。また集落の農地に関しては、「代わりに」稲作をしているだけであり、それぞれの田圃は個人のものである。そういった点から、稲作グループは集落営農ではないとすることができる。

### 3-3. 稲作グループの活動

水の管理はメンバーの親に任せているが、その他の活動は通常の稲作と同じである。

稲作グループの活動は、ほとんどのメンバーが自分の仕事を持っているため、平日ではなく土日祝日におこなわれる。また、グループのものとは別に、メンバーは個人の田圃を持っているため、グループの田植えや稲刈りは、個人の持っている田が終わってからやることになっている。そのため、通常の田植えや稲刈りをする時期とは一週間ほど遅れて作業することが多い。また、草刈りは多くても3回ほどしかない。

そのうち田植えと稲刈りに参加し調査をした。以下、様子をふまえて詳細を報告する。

#### 田植え

田植えは通年どおり、一週間遅れで、2012年は5月19日におこなわれた。朝8時に集合し、持ち寄った田植機で作業を開始する。この日は3台の田植機が使われた。今年は、500枚の苗を買って、25枚の田に植えた。

12時を過ぎたときに苗をとり泊の方へおり、帰ってくると昼休憩になる。昼休憩のときは写真8のように全員でお弁当を食べながら談笑していた。午後の作業開始は13:30からで、13枚ほどの田植えをして、田植機を洗ってから1日目は終了する。

作業は、基本的に機械の持ち主がそのまま運転し、他の人は苗や肥料の追加、休憩時の飲み物の準備などをする。写真9は、田植えが終わって田圃から機械を出すところだが、泥にはまって出せなくなってしまったのを、メンバーで協力して引っ張っているところである。このように、メンバー同士で協力しあっている姿はしばしば見られた。

翌日、朝8時から苗のプランターを洗って、返却して田植えは終了となる。



写真 8. 昼食の様子



写真 9. 田植えの様子



写真 10. 新式 (左) と旧式 (右) のコンバイン



写真 11. 稲もみを専用の軽トラックに入れる

### 水の管理

水の管理は、メンバーの親の二人がおこなっている。5月は、植えた稲を分けつさせ（新芽をださせて株を増やすこと）、株を太くしてもらうため水を溜めておく。6月には、中干しといい、稲の根が地面につくように水を減らし、田圃を乾かす。

### 稲刈り

普段であれば、9月末頃に自分の田圃の収穫をし、10月の一週目にグループの稲刈りをするため、地域の運動会と日が被ることが多い。2012年は、日照りが長く続いたため、稲の生長が早く、通年より2~3週間ほど早い収穫となり、9月の16~17日と、次の週末の22日に稲刈りはおこなわれた。先におこなわれたものは、すべて農協に出荷する米で、22日におこなわれたものは、笹川米として注文した人に届ける米である。

稲刈りのときも、コンバインは持ち寄りで行われる。田がやわからいところには、重たい新式のコンバインは入れないので、写真10のように軽い旧式のコンバインを使う。

稲刈りは、朝露が残っているとコンバインによくない、ということで、9:30から作業開始となった。12:30頃に1時間ほどの昼休憩、それから一通りの区切りがつくまで作業をする。稲刈りをする、コンバインに脱穀された米がたまるので、それを写真11のように専用の軽トラックに移して、乾燥機まで運ぶ。

稲刈りのときは、農協に出荷するものと、笹川米として注文を受けているものに分ける。笹川米の注文は、笹川在住の人や、笹川出身で東京在住の人などからよせられる。農協に出した米は、朝日町全域から集められたものと混ぜられて朝日町産のコシヒカリとして出荷される。注文を受けた笹川米の分はそれとは別に、グループメンバーの持つ乾燥機に入れる。

### 飲み会

作業が終わると、たいてい飲み会が開かれる。ほとんどの人は、「この飲み会のために稲作をしている」「飲み会という楽しみがなければこんな作業やっつけられない」と笑いながら話す。日中の暑く、つらい時間に作業をする、そのモチベーションを保つために必要なものとなっている。

この他、草刈りを、6月と7月とにしているが、稲作グループはメンバーが忙しいこともあって、草刈りの回数は通常の田圃に比べて少ない。現在田圃の水を管理している70代の女性は、「もともと草刈りもしていたが、管理する田圃は増えるし、年は重ねるしで、今では自分の田圃を管理するので精一杯」と話す。

### 3-4. 小まとめ

笹川では、集落営農とは異なった稲作の組織として、現在、40～50代の人によって構成される稲作グループささ郷が存在している。できた当初はグループの持つ田圃は少なかったが、10年ほど経った現在では25枚、2町5反の田圃を「代わりに」営んでいる。このことから、グループが笹川の稲作を支える重要な存在になっていることがわかる。

## 4. 稲作をする人々の語り

ここでは、田圃を稲作グループに預けている人や稲作グループのメンバーを含め、稲作をしている人の語りをまとめる。

### 4-1. 笹川で稲作をしている人の語り

作業については、ほとんど誰もが「大変だよ」と答えた。そのため、「田をやめたいとは思いうけど」と話す人もいた。ある80代の女性は、「今は、息子と二人でなんとか田圃をしている。機械でできないところは手作業でやるけど、この歳になるとそれもだんだん難しくなってきた」と渋い顔で話した。しかしそのあとに「やめるっていうことは、その土地を捨てるのと同じこと。そう思ったらやめられない」と続けた。70代の男性は「大変だけど、(田圃を)持っているから続けている」と語った。このように、持っているから田圃をしている、という人は多い。

また、「作業は大変だし、お金もかかるけど、自分で作ったお米が食べたいから稲作を続

けている」と話す人もいる。こう話したのは60代女性で、以前は朝日町宮崎の方に田圃を持っていたが、他の人が田圃を捨てていって荒れ田が増えたので、笹川に田圃を持ってそこで稲作をしているのだという。「機械を持っているわけじゃないから、親戚の人に頼んで手伝ってもらっている。業者に頼んだらお金がかかりすぎるし、実際今の状況でも、作るより買う方がずっと安い」と話した。「実際、作るより買った方が安い」と話す人は他にもいる。それでも稲作を続けるのは、やはり自分が田圃を持っているからだという。

稲架掛けを続けている家では、「確かに稲架掛けをするのは大変だけど、コンバインは高いし」と言葉を濁したが、「ずっと昔からこうやっているから、稲作っていうのはこういうもんだと思っている」とそのあとに続けた。「お米は売りに出すわけでもないし、本当に趣味でやっているようなもの」と70代の男性は話す。

現在笹川で稲作をしている人たちは、作業が辛い、大変ということをいいながら、自分が田圃を持っているから、自分で作った米を食べたいから、趣味で、といった理由で稲作を続けていることがわかる。

#### 4-2. 田圃を預けている人の語り

どうして稲作グループに田圃を預けたのかという質問に、70代男性は「膝がだめになって田に入れなくなった」と答えた。「手押し田植機を使っているから、いつも田にはいらなくてはいけないが、それができなくなった」と語る。現在農業の機械化が進んでいるが、田植機を一台買うだけでもお金がかかる。そのため、とくに70～80代の農業者は初期の頃の機械を使い続けていることが多く、その場合田圃に入って作業しなければならない。

田圃を預けることに抵抗はあったかと聞くと、「できないものは仕方ない」と80代女性は答えた。また、別の80代女性は「田圃は大好きだけど、やれなくなったら仕方のないこと。それを誰かがやってくれると言うなら、ありがたくやってもらうしかない」と話した。昔から田圃ができなくなると、それを継ぐ人がいなかったときには別の人にやってもらうことはよくあることだった。しかし、「そういうときは親戚にやってもらうのが一般的だったけど、いまじゃその親戚も田圃がやれるような歳じゃない」と70代女性は話す。笹川では根本的に跡継ぎ不足が問題となっていることがわかる。

稲作グループの存在については、「ありがたい」や「助かる」と話を聞いた誰もが答えていた。「跡を継ぐ人もいないし、ああいうことをしてくれるとありがたい。そうでなかったら笹川の土地は荒れ放題になる」と80代女性は話した。

現在稲作グループに田圃を預けている人は、田圃をやめたくてやめた、というよりは、体の具合などでやめざるを得なかったということがわかる。そうした人も、自分では管理できないが、田圃を荒れさせるわけにはいかない、という気持ちは他の多くの笹川の人と共通している。笹川において稲作グループかなり重要な役割を担っていることが見えてくる。

#### 4-3. 稲作グループメンバーの語り

次に、稲作グループのメンバーである40～50代の男性に話を聞いた。以下では、稲作について、グループで活動をする醍醐味という枠組みで語りをまとめる。

##### 4-3-1. 稲作をするということ

作業については、「仕事も忙しい中、一ヶ月ほど作業に追われ、毎日休みなく働かなくちゃいけないのは大変」と話す人や「田植えの5月と稲刈りの9月は本当に休みがない」と、作業の忙しさを語る人が多かった。「最初のうちはやめたくて、いつやめようかと思っていた」と語った人もいる。また、冗談っぽく「いやいやながらやっているのさ」といった言葉もあった。作業そのものについては、「暑くなるし、稲刈りの方が疲れる」や「田圃をいくつもやっていて草を刈る範囲が広いから、それが大変」という話が聞かれた。

それだけ大変な作業をして、田圃をやり続けている理由はなにか、と尋ねると、「田圃は草だらけにできない、大切な財産」や「村を守るためにやっている」と答えた。ここでも、多くの人と同じような気持ちを持っていることがわかる。同時に「やっているんだから仕方ない」とか「俺たちのような（笹川に住む）者にとって、田をやるのは当たり前のこと」といった言葉もあった。これはグループの田圃だけではなく、個人の田圃のことも含めると考えられる。「笹川は、町の方とは違ってずっと閉じてて、周りの大人たちはみんな休日もなく作業をしている。町の方でなら遊んでいる人とかも見たらうけど、笹川はそうじゃない。そう言うところで育ったから手伝うのが当然になるし、だからこそ今もこうやって作業をしている」と語った人もいる。

このように、子どものときからずっと稲作を見てきたので、現在も稲作をしている、という人はグループの中にも多い。

##### 4-3-2. グループ活動の醍醐味

グループで活動することについては「皆で集まって話しながら作業すると（いつも一人でやっているのとは）雰囲気が違う」、「一人で大田にぼつんといたらできないが、皆でやっているからこそできること」や、「みんなが（田圃の）経営者。だからこそ、みんなやらなくちゃ」と話す。稲作を一人でするのは違い、グループで活動することで人と話しながら、冗談を言い合いながら、メンバー同士が励ましあって作業をすることができる。それがグループで活動する醍醐味の一つとなっているようだ。また、個人の田圃以外で稲作をすることについては、「小遣いをためる程度のもの」と答えた。「みんなサラリーマンだし、お金には困ってない。だからこの稲作は道楽みたいなもの」と語る人もいた。そのため、グループには立ち上げたときから、「とにかく仕事を休んでまでは（グループの活動に）出るな」という決まりがある。「そうでもない活動が続かない」、「みんなそれぞれ趣味があるし、やりたいことがある」ということを考慮したグループの方針である。メンバーを活動に拘束せず、「道楽でやっている」という言葉がある通り気を楽しんで活動していることがわかる。その反面、「もちろんやる時はきちっとやらなくちゃいけない」とい

った語りもあり、メンバーははじめを持って活動をしている。

「やっけていいことはなにか、という質問には、全員が「飲み会」と答えた。「飲めるからやっけてる」とか「飲みに行くのが原動力」という話が多かった。

これから先の、グループや笹川の稲作については、「もうしばらくしたら定年になる人とか出てくるし、もう少し（農作業やその手際が）うまくいくようになるかもしれない」と、プラスに考える一方「もう一世代下の人らに継いでいかなくちゃ」という焦りの声もあり、「次の世代がないことには、笹川の稲作も終わっていくんじゃないか」と語る人もいる。

「最終的には全部グループが（稲作を）するようになるかもしれない。そのときはそのときだ」と50代男性は語る。「だけど若い者もいまじゃ稲作はしなくなっけてきているし、（これから先のことは）どうなるかわからない。とにかく、（一世代上の人に）やってもらえるうちはやってもらおうしかない」と先を案ずるように話した。

## 5. 笹川の「田圃」と稲作グループの果たす役割

以上の語りをふまえて、ここでは、笹川の「田圃」とはどういうものか、そして、稲作グループの果たしている役割とはなにかを考える。

### 5-1. 笹川の「田圃」

田圃は、もともと生きていくために必要な食料を作る場所であり、稲作は笹川の人にとって重要な生業の一つであった。かつての稲作のことを尋ねていると、「あの頃は田圃にすがつっていた」という語りを聞くこともあった。

しかし、田圃を持っている人に、どうして稲作を続けているのか、という質問をしたところ、「（田圃を）持っているから」や「子どものときからずっとやっけてることだから」という答えが返ってきた。稲作というのは、子どもの頃から携わりながら、代々田圃を引き継いでやっけていくものだった。ところが、高度経済成長などで多くの人々が職を手にするようになり、田圃をしなければ生活できない、ということは次第に減っていった。その結果、現在の笹川では生業としての稲作は姿を消している。

稲作は「子どもの頃からずっとやっけてる」からやるものであり、必ずしも生活していくため、生きていくためのものではなくなっけてきた。それどころか、「実際、米は（自分で作るより）買った方が安い」という話もよく聞く。つまり、現在の「田圃」は生業とはかけ離れ、代々続いた土地を守るためや、趣味、あるいは自分で作った米が食べたいからといった理由で作られている。実際、定年を迎えていない60代までの稲作をしている人は、ほとんど自分の仕事をしながら稲作をしている。そして、「サラリーマンだし、お金には困っていない」と話す。

笹川では、生業としての稲作がなくなり、守られるべき土地としての「田圃」が残っている。荒れ田にして代々作っけてきた田圃の土地を終わらせてはいけな、自分の代で終わらせるわけにはいかな、という思いから、笹川の人たちは「田圃」で稲作を続けてる。



しかし、機械化が進み、以前ほど人手が必要なくなったため、子どもの頃から稲作をやってきた人が少なくなり、また職業選択の幅が広がったことで農業従事者が減って、跡継ぎがいなくなってきた。そして、「田圃」で稲作をしてきた人も、膝が悪くなったり体が弱くなったりして、自分の土地を管理できない状況になってきた。

## 5-2. 「田圃」を守るということ

そうした中で結成されたのが稲作グループである。グループは耕されなくなった「田圃」を代わりにやる、という目的で結成されたものである。「代わりにする」というと小作のように見えるかもしれないが、稲作グループは土地の持ち主に年貢を払うことはない。つまり稲作グループがやっていることは地主に代わって農作業をすることではなくて、代わりに「田圃」の手入れなどをして、「田圃」としての土地を守ることであり、といえる。つまり、土地と収穫物に関して差別化が図られているのである。土地に対しては代わりに手入れしているが、稲作そのものは代わりにやっているわけではない。稲作は「田圃」を手入れする有効な手段の一つにすぎず、そのためその収穫はすべてグループのものとなるのである。

また、集落の「田圃」を耕す、ということ前に書いた集落営農を思い浮かべるかもしれないが、集落営農とこの笹川の稲作グループは、組織としてではなく、考え方や存在する意味としても違うところがある。上でも書いたが、それらは農地の扱われ方から見えてくる。

集落営農では、基本的に作業の効率化を目指しており、「農地全体をひとつの農場とみなし」という文言が使われる。しかし稲作グループは、個人の持っている「田圃」を「代わりにやっている（手入れしている）」だけであり、農地は個人のもと考えている。実際、グループの中で「〇〇さんの『田圃』」という表現を使うことがあるし、「やってもらってありがたい」や「助かっている」という「田圃」を預けた人の言葉からも、その「田圃」が個人のものであるという意識を持っていることがわかる。

つまり集落営農では、農地を集落のものとし、参加する農家全員が同じ立場で田圃を管理する、という考え方をしているのに対し、笹川では、「田圃」を代わりに耕す（手入れする）人と、「田圃」を預ける人、という二者が存在している。グループが提唱しているとおり、稲作グループの役割は「できなくなった人の代わりに『田圃』をやる」ことである。そこで『田圃』は財産」という語りを思い出すと、稲作グループは笹川の財産を守っている、ということができる。つまり、「田圃」を代わりに耕す人と「田圃」を預ける人は、守る存在と守られる存在と呼ぶことができよう。

## 5-3. 明確化するコミュニティ

まず、ここでのコミュニティについて定義したい。笹川では、昔からイイスル、イイスラスがあったばかりではなく、持っていない調理道具を貸しあったり、わらじの作り方や料理の作り方などを教えあったり、と人々が濃いつながりを持っていた。調査中も、「〇〇さんならやり方を知っているから」ということでその人に頼っている姿を目にしたことが

ある。また、多くの人が笹川で生まれ育っているため互いに面識を持っており、同世代の人とはもちろん、上下世代とも仲の良い交流をしている。つまり、笹川の人はいくつかの信頼をもとにした相互依存的な関係を形成している。以上をふまえて、ここでは信頼をもとにした相互依存的で密な関係を持ち、また幅広い地域内交友ネットワークを持っている集団をコミュニティと呼ぶ。

稲作グループは、笹川の財産である「田圃」を守っている、という話をした。その「田圃」はもともとメンバーより上の世代の人たちが使っていたものだったが、稲作グループに管理を任せるようになった。実質的に土地を受け継いだわけではないが、こうしてみると稲作グループは財産を受け継いだ跡継ぎのようにも見える。このように笹川では、稲作グループをめぐって一村一家のような関係が構築されている。自分の財産を任せるのだから当然信頼関係が構築されていることが前提である。

稲作グループのメンバーはそのほとんどが笹川で生まれ育った人であり、「田圃」を預ける人とは面識がある。そのため預ける人も、稲作ができなくなり跡継ぎもないときに、知っている人がやってくれるのなら、と安心して任せることができる。これは、頼ったり頼られたりする人々のつながり、つまり笹川のコミュニティを最大限に利用したものであるといえる。「田圃」をやってもらい、「田圃」を代わりにやる（手入れする）という具体的な関係が築かれることで、それまで同じ村に住む者同士という関係で形成されていたコミュニティが、より明確化した形で現れるのである。

#### 5-4. コミュニティの期待とアイデンティティの発揮

ここでアイデンティティとは、地域という横の広がり、そこでコミュニティとともに過ごしてきた時間（個々人の歴史）から生じる郷土愛、コミュニティに対する愛着がもととなって生まれる、「自分は笹川に生きる者」という自負心のことと定義する。

稲作グループの人たちは、財産を守るという重責を、周りからの期待（コミュニティの要望）だけでおこなっているのだろうか。たしかに稲作グループのメンバーは、笹川という村の中で、そのコミュニティとともに時間を過ごしてきた。その中で郷土愛や所属意識を育み、アイデンティティを持って笹川で生きている。このように、コミュニティに寄り添うようにして形成されたアイデンティティを持っているため、笹川というコミュニティの影響を受けてはいる。

しかし、「村を守るためにやっている」という語りは、数人の稲作グループメンバーから聞かれたことである。これは、集落の土地や財産を守る、という自発的な使命感を持っていることから出てくる語りであろう。「田圃」を荒れ田にしてしまえば、代々継がれてきた笹川の財産がなくなってしまうことになる。それは、笹川で生まれ、生きる者として、決して喜ばしいことではない。つまり稲作グループのメンバーは、「自分は笹川に生きる者」というアイデンティティを持っているために、荒れ田を増やすわけにはいかない、と思って活動をしているのであり、それはアイデンティティの発揮といえるのではないだろうか。

## 6. まとめ

笹川で長く営まれてきた生業としての稲作はすでに姿を消し、現在では代々稲作に使われてきた守るべき土地としての「田圃」だけが残っている。管理できるうちは元々の持ち主がしているが、10年ほど前から管理できなくなってきた「田圃」が出てくるようになった。そこで、稲作グループが結成される。

稲作グループは「管理されなくなった『田圃』を代わりにやる」グループである。ただ、メンバーは「田圃」を頼まれたからという理由だけではなく、自分たちが村を守る、守らなくてはいけないという気持ちを持って活動している。この気持ちは、自分の育った村に対する愛着心から生じていることから、稲作グループの活動はアイデンティティの発揮の場と考えられる。

また、稲作グループは集落営農と違い、個人の持つ「田圃」を代わりに使っている。そこには「田圃」を代わりにする人、「田圃」を預ける人という、守る存在、守られる存在がいる。「田圃」においてこうした信頼的な相互依存関係が築かれることで、それまで同じ村の人だからという関係だったコミュニティがより明確化される。

稲作グループはこのように、個人のアイデンティティの発揮の場としての役割を果たしているだけではなく、以前からイスル、イイサスという形などで存在していた笹川のコミュニティにおけるつながりを明確化し、住民同士がコミュニティを確認しやすいものになっている。

## 謝辞

今回、笹川の稲作を調査するにあたって、稲作グループの代表、竹内重之様をはじめ稲作グループのメンバーの方々、また話を聞かせてくださった笹川の皆様方に大変お世話になりました。

稲作グループの方々には、初めて稲作というものに触れ、また車の免許も持っていないのに手伝いに呼んでいただき、大変な迷惑をおかけしたとは思いますが、あたたかくしてください、本当に感謝しております。田植機やコンバインにも乗せてくださり、稲作というものを肌で感じることができました。今でも米の袋を開けたとき米の香りをかぐと、稲刈り中や、乾燥機の前でかいだ笹川米のことを思い出します。本当に何もかも初めてのことで、大変貴重な体験ができました。ありがとうございました。

勝田忠温様には、愛知からの中学生の稲刈り体験のときばかりか、ご家族でやっている稲刈りにも参加させていただきました。稲の手刈りや、ヤンダさせていただき、ただ稲作をやるだけではなかなか体験できないことをさせてくださりました。ありがとうございました。

笹川獅子舞保存会の皆様には、まったく経験のない私に太鼓を教えてくださいたり、秋祭りの時には神楽を担がせていただいたり、非日常的な体験をすることができました。

炭焼きグループの方々には、炭焼きの話をお聞かせいただいただけでなく、猪肉をいただきます、窯入れに誘っていただいたりしました。初めての猪肉は、とてもおいしかったです。ありがとうございました。

笹川に8月13日から26日までの約2週間築山倶楽部に泊めていただき、町内会長の小林茂和様、夕食に誘ってくださり、毎日のように風呂を貸してくださった竹内幹子様、その他築山町内会の皆様にお世話になりました。時には食事まで用意してくださり、とても快適な宿泊と、集中した調査をすることができました。また、笹川で最初に知り合って、つながりを作ってくくださった足田由香里様には大変感謝しております。

今回の調査が無事終了いたしましたのも、笹川住民の皆様のご協力のおかげだと痛感しております。笹川のみなさんには、話を聞かせてくださったり、行事に参加させていただいたり、ご多忙のところ大変な迷惑をおかけしましたが、あたたかくしていただきました。笹川はすっかり第二のふるさととして私の心に刻まれております。今回笹川で調査できたことを本当にうれしく思っています。誠にありがとうございました。

#### 参考文献

笹川小学校 1994年 「ささ郷の流れとともに」

農林水産省 [http://www.maff.go.jp/j/kobetu\\_ninaite/index.html](http://www.maff.go.jp/j/kobetu_ninaite/index.html) (2012年11月7日閲覧)